

卷頭言

八幡林遺跡に近づくと、青い空と輝く太陽が私たちを迎えてくれた。前日夕方、雹をまじえた激しい雷雨にみまわれたのが嘘のようだ。夜のテレビの天気予報では、翌日、雨の降る確率八〇パーセントだった。

新潟の街を初めて訪れた私は、前日午後、旧新潟税関庁舎を見学したあと、会津八一記念館を訪れた。すごい雨が降り出したのは、そろそろ帰ろうと思っていた頃だった。傘もさせない。タクシー会社の電話は話中。やつと三、四十分ほど待って来てくれたタクシーは、今度は道路にあふれた水のため、ブレーキがおかしくなる。新潟の昔からの街は、船も大事な交通手段で、水路を埋めた道路が多いと聞く。昨年訪れたタイのバンコクでは、かつては水路がほとんどで、水路を埋めた道路に、大雨が降るとすぐ水があふれるという。その僅かな経験のおかげで、新潟平野の自然環境についての坂井秀弥氏のシンポジウムでの報告を、実感をもって聞くことが出来た。

木簡学会の研究会が奈良以外の地で開かれたのは、一九九〇年に川崎市の市民ミュージアムにおいて「古代東国と木簡」と題する展示とシンポジウムが開かれたことがあるが、遺跡の見学を含めて現地で研究集会が開かれたのは最初である。小林昌二氏をはじめ、準備にあたられた方々のご苦労が大変だとは聞いていたが、実際に参加させていただいて、ご尽力の並々でないことが痛感された。見学会の晴天は、まさに天の賜物としか思えなかつた。

日頃、文献史料で勉強している私には、八幡林遺跡の現地の迫力は圧倒的だった。四年前、佐倉の歴博の地下の調査室で、ビニール袋に水詰された沼垂城木簡と郡符木簡を見せていただいたとき、渟足柵の出現と、鋭く切れ目を入れて三つに折られ

た郡符木簡に心を奪われながら、これほど豊かな遺構や遺物がその後に発掘されるとは、恥ずかしいことに全く予想できなかつた。シンポジウムで小林昌一氏と田中靖氏から、密接に関連した保存運動と発掘調査の経過を伺い、遺跡保存の重さをひしひしと感じた。郡符木簡と封緘木簡をめぐる佐藤信氏と平川南氏の報告も、重要な問題を提起した。特に、割りさいた二枚一組の封緘木簡の一方には、文字が記されていない場合が多いとの指摘は、文字のない木簡の存在という、大きな課題を投げかけた。木簡学会の前身である奈文研の木簡研究集会の第一回に、岸俊男先生は「木簡研究の課題」と題して報告され、「墨書きのある木片についてばかりでなく、木簡状加工木片をも広く木簡として取り扱い、併せ考察すべきこと」を提言されたが（『木簡研究』第九号巻頭言参照）、その提言が具体的に発展させられたことになる。

いまこの草稿を書いている机の上には、『木簡研究』創刊号から昨年の一五号までが積まれている。私事にわたくて恐縮だが、数年前から私は、勤務先の大学の推薦入試の日が、木簡学会の大会と重なるため、第一日は出席できない状態が続き、これからも続きそうである。大会にきちんと出席できなくなると、『木簡研究』のありがたさが、より一層身にしみる。もし木簡学会が設立されず、『木簡研究』が創刊されなかつたら、と考えると、学会の設立と年報の創刊に尽力された先学の高い見識にあらためて感銘をうける。『木簡研究』のあり方については、岸先生の「創刊の辞」に明確に示されている。「編集に当たつては、全国にわたる出土木簡についての情報をできるだけ的確に集成して、現在のみならず将来に対しても木簡の基本的史料集としての使命を果し得るよう、とくに配慮した。しかしこうしたことは会員の篤志と熱意、そして何よりも木簡を出土した遺跡の発掘調査を担当された方々の尽力なしには成就しえない」。岸先生が予見されたように、『木簡研究』の作成は大変な事業で、『木簡研究』も、——会員数や大会の問題とともに——いま大きな障害にぶつかつている。毎年、編集を担当された委員・幹事、とくに奈文研の方々のご苦労を、ただ傍観してきた私には、どうしたらよいのか具体策は分からぬが、『木簡研究』を作成するシステムの拡充・強化も、今後の木簡学会の重要な課題と思われる。

（吉田 孝）